

ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』 : 第16 挿話「エウマイオス」の語り手

著者	大島 由紀夫
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	6
ページ	25-32
発行年	2010-02-26
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000362/

ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』： 第16挿話「エウマイオス」の語り手

大島 由紀夫*

(Accepted October 30, 2009)

The Narrator of 'Eumaeus' in *Ulysses*

Yukio OSHIMA*

Abstract: In 'Eumaeus', the 16th episode of *Ulysses*, Bloom has traditionally been considered to be the narrator of the episode. The style of language Bloom uses in the other episodes, however, turns out to be so different from the one used in the episode that it is difficult to assert Bloom to be the narrator. Another character, Lenehan, not Bloom, could be identified with the narrator because he uses a verbose and roundabout style of language characteristic of the one used in the episode, with some other points common to the narrator. But Lenehan, who is funny and flippant as a character, has transformed himself into a bit serious and grand personality as a narrator.

Key words: *Ulysses*, Eumaeus, narrator, Lenehan

序

『ユリシーズ』の第16挿話「エウマイオス」の文体の特徴は、クリシェーの多用と冗漫さにある。使い古された定形表現・成句がふんだんに使われ、冗長な文と過剰な言語使用による回りくどい描写や説明がなされている。こうしたとりとめのない文体を操る語り手は、どのような類いの人物であろうか。『ユリシーズ』の初めの数挿話における全知全能の語り手、いわゆる「イニシャル・スタイル」の語り手が再び現れたのか。それとも第12挿話の無名の一人称の語り手のような作中の一人物か。あるいはこのどちらとも性質を異にする、第3の部類に入る人物か。以下この挿話の文体等を検証し、この語り手が『ユリシーズ』の中の一登場人物であること、しかしその登場人物は作品中のそのままの姿ではなく、ある仮定の上になりたった、作品中とは異なる性格をもった人物になっていること、そしてその人物がレネハンと推定されることを述べていきたい。

(1)

この挿話の語り手は、一応全知全能の語り手と言える。彼は各登場人物に関わる、その人物以外の人物では知り得ぬような細かな個人的な事柄や過去の経験、またその複雑な心理状態を語る。しかし彼のこうした豊富な知識や能力には限りがある。彼の我々読者にもたらす情報が不十分であったり、混乱していたり、伝聞であったり、推測の域を

出ないものであることを示す箇所がいくつかある。

Rumour had it (though not proved) that she descended from the house of the lords Talbot de Malahide. . . (16.135-7)

(証明されたことではないが)、噂によると、彼女はトールボット・デ・マラハイドの家の出であった。

He turned away from the others who probably and spoke nearer to, so as the others in case they. (16.1117-8)

ブルームは他の者たちに背を向けた。彼らはたぶん、そしてもっと近づいて話した。出来るだけ他の者たちが、方一彼ら。

Carefully avoiding a book in his pocket *Sweets of*, which reminded him by the by of that Capel street library book out of date, he took out his pocketbook and, turning over the various contents it contained rapidly finally he. (16.1421-4)

注意深くポケットの中の『の甘さ』という本—ちなみにこの本は、カペル通りの図書館の貸出期限が過ぎていることを彼に思い出させたが—を避けながら、ブルームは手帳を取り出し、そこに書かれてある様々な内容を急いで読むと、ついに彼は。

Then the old specimen in the corner who appeared to have some spark of vitality left read out that sir Anthony MacDonnell had left Euston for the chief secretary's lodge or

* Department of Maritime Systems Engineering, Faculty of Marine Technology, Tokyo University of Marine Science and Technology (2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan)
(東京海洋大学海洋工学部海事システム工学科)

words to that effect. (16.1665-7)

その後、活気の火花がまだ残っているかに見えた隅にいた老人は、アントニー・マクドネル卿がユーストン駅を出て長官の官邸に向かったとか、そういう旨の記事を読み上げた。[いずれの引用も傍点筆者]

この四つの引用文はどれも、この挿話の語り手が事象の様態を鮮明に描ききれず、全知全能の語り手としての能力が完全ではないことを示している。最初の引用文では、語る対象に関する知識が不十分で、噂話という不確実な情報源に自分の語りを基づかせている。二番目の引用文は、ブルームの言動と心理、および他の客たちの動勢を的確に把握しておらず、事象の有り様を整理して語る前の段階の混沌とした語りになっている。三番目もブルームが買った、*Sweets of Sin* [『罪の甘さ』] という本についての情報の把握が不足し、題名の表記が不完全になっている。また語りを途中で中止しているが、これも以降の事象についての把握ができなかったため打ち切らざるを得なかったものと推測される。最後の引用文の前半部分の傍点箇所も、事実ではなく推測が基になった表現であり、後半部分では自分で得た情報が事実かどうかの確信がもてずに、表現をぼかさざるを得ない羽目に陥っている。

ではこうした全知全能になり損ねたと言ってもいい「エウマイオス」の語り手は、この挿話の物語世界それ自体とどのような関係にあるのであろうか。

一般的に言えば、全知全能の語り手は通常物語世界の外側にいる。物語中の事象と直接の関わり合いをもたず、物語の世界から離れた立場で、すべての事象を既知のものとして、時には自分の意見、見解を含めつつ我々に語る。それに対して「私」と称する一人称の語り手は、物語中の事象を直接体験、あるいは体験しないまでも伝聞し、その状況や結果、またそれに対する意見を、いわば物語の「内側」から我々に報告する。

こうした図式から考えると、全知全能とするには中途半端なこの挿話の語り手はどのような位置にいるのか。彼を物語世界の「外側」にいる単なる無能な全知全能の語り手と片づけることもできるかもしれない。あるいは、語り手の不完全性は、登場人物の視点の限定性によるものという観点から、例えばフローベルの『ボヴァリー夫人』の語り手のような、ある登場人物の視点を借りて、その人物の目にしたもの、耳にしたもののみを、その人物が目にしたとおりに、耳にしたとおりに、言うならばその人物の肩越しに位置して事象を物語る、能力の限定的な全知全能の語り手という考えも思い浮かべられるかもしれない。しかしながらそうした考え方は首肯出来ないところがある。ジョイスが安易に無能な語り手を登場させているだけとも思えないし、また肩越しの語り手も既に第4挿話などに登場させており、語り手のあり方に挿話ごとに変化をもたせる『ユリシーズ』の性質から言って、既出の手段を再び採用するよ

うにも思えないからだ。この場合考えられるのは、一人称の語り手でもなく、さりとて全知全能の語り手としても不完全なあいまいな存在になっているのは、むしろ一人称と全知全能両方の性質をもっているがゆえにあいまいになっているという観点からの、今まで物語の内側にいた登場人物が、物語の外側にいる全知全能の語り手の地位に就いて語っているという見方であるように思える。

こうした考え方は実はよくとられるものであり、多くの批評家は語り手の正体をブルームに求めている。例えばヒュー・ケナーは次のように言っている。

He [Bloom] is treated to an episode written as he would have written it. ⁽¹⁾

ブルームは彼ならばこう書いたであろう書き方がなされている挿話中の人物となっている。

また別の箇所でも次のようにも言っている。

And we are meant to suppose that Bloom might be executing it [the style of "Eumaeus"], had he the time and the freedom from distraction. ⁽²⁾

もし彼 [ブルーム] に時間があって、そしてまた注意散漫でなかったならば、「エウマイオス」の文体をとったであろう、と思うように我々は仕向けられている。

つまりケナーは、この挿話の語り手を一定条件の下で変容したブルームと見ている。これに類した考え方は、ダニエル・R・シュワルツもとっている。

Disguising himself as Bloom, the narrator writes as someone with Bloom's education and pretensions might. ⁽³⁾

語り手はブルームに変装して、ブルームの教育程度と見栄をもった者が書いているように書いている。

変容と変装の違いはあるが、基本的にはブルームと語り手は一体化していると両批評家は考えている。

しかしこうした考え方には疑問とすべき点がある。ブルームを語り手と証明するだけの証拠が乏しく、むしろそれを否定する方の証拠が目立っているのだ。つまりこの挿話の文体的特徴が、実際のブルームの使用言語には見当たらないのだ。確かにブルームの使用言語はほとんど会話言語か内的独白の文句で、この挿話の文章体と一概に明確な比較はできないであろう。しかしそれでも特にリアリズム的要素の濃い第4挿話における彼の言葉は、大体において彼の実際の、科学的分析的、現実主義的性格を反映して明確、簡潔、非技巧的であり、第16挿話の不鮮明、冗長、技巧的な文体とは性質を異にしている。例えば猫についての彼の思考の中の言語をみてみよう。

They call them stupid. They understand what we say better than we understand them. She understands all she wants to. Vindictive too. Cruel. Her nature. Curious mice never squeal. Seems to like it. Wonder what I look like to her. Height of a tower? No, she can jump me. (4.26-29)

みんな猫は馬鹿だと言っている。しかし僕たちが猫の言っていることを理解するよりも、猫の方が僕たちの言っていることをよく理解している。この雌猫は理解したいことすべてを理解している。復讐心もある。残酷だ。この雌猫の習性。詮索好きなネズミはけっして鳴かない。ネズミが好物らしい。この雌猫にとって僕はどんな風に見えるのだろう。高い塔のようにか。いや、僕を飛び越えられるからな。

彼がいくら変容したところで、こうした明晰さを基本とする彼の言語は「エウマイオス」の文体には行き着きにくいように思われる。マリリン・フレンチも、*The style of Eumaeus lacks Bloom's acuteness and honesty.*⁽⁴⁾ [「エウマイオス」の文体はブルームの鋭敏さや正直さを欠いている] と言い、続けて次のように言う。

Since no doubt Bloom is trying to impress or at least interest Stephen, the style symbolizes the tone of the actual scene. Nevertheless, the style does not do justice to Bloom. Bloom would never be guilty of the pseudo-elegance and clichés of the following.⁽⁵⁾

言うまでもなくブルームは、スティーヴンに好印象をもたれようとしている、少なくとも関心をもってもらおうとしている。それ故この文体は実際の場面の雰囲気象徴化している。それにもかかわらずこの文体は、ブルームが使うようなものではない。似非優雅さや次のようなクリシェの罪をブルームは犯さないであろう。

語り手を変容したブルームとする見方は、『ユリシーズ』の研究において散見される、いかなる問題もブルームに関連させて答えを求めようとするブルーム還元主義とでも言うべき考え方の一つであり、実証性に欠ける嫌いがあるように思える。

ではこの語り手の文体的特徴をもつ『ユリシーズ』中の登場人物は誰なのか。拙論ではこの答えをレネハンに求めたい。この挿話の語り手の文体とレネハンの使用言語に関連性が窺えるし、またさらに語り手の性質とレネハンの日常の言動とを比べてみると、そこにもある種の共通性が発見されるからである。

(2)

レネハンをこの挿話の語り手とする主な根拠は、両者の文体の間に類似性が見られるということである。ブルーム

の場合とほぼ同様に、我々が『ユリシーズ』の中で目にする彼の言語は、彼の話し言葉だけである。しかしそれでもその会話には、彼の言葉遣いの特徴を如実に示すものがある。即ち、技巧的、装飾的、遊戯的という特徴である。特にこの特徴が現れているのは第7挿話においてである。この第7挿話におけるレネハンには、率直で直截な物の言い方をせず、言葉をひねくり、こねくり回し、話し相手への意思の伝達よりもむしろ言葉遊びの方に重きを置いて発話していることが多い。こうした彼の言語表現は、概して伝達上 unnecessary な表現と言葉の過剰を引き起こし、冗長さを生み、「エウマイオス」の語りの特徴に通ずるものとなりがちである。

例えば、まずマイルズ・クロフォードが著名なジャーナリスト、ディック・アダムズの名前をもち出したのに対応して、レネハンには *Madam, I'm Adam.* (7.683) という回文を口にする。この回文は会話の中では意味性、伝達性をほとんどもたず、単なる言葉の戯れに過ぎない。こうした戯れが重なると、内容は空虚でありながら言葉だけは多いという結果に至る。この戯れは冗長さの元であり、「エウマイオス」の文体の因子とも言える。しかもこの回文は、あまりにありふれた回文である。その点で「エウマイオス」のクリシェを想起させる。確かにレネハンはその会話の中でクリシェを多用しているわけではないし、またこの挿話に回文が出てくるわけでもないが、しかしこの回文は冗長さと陳腐さをもつという点で、レネハンと語り手に関連性があることをほのめかすものと言える。

レネハンにはまたフランスのジャーナリスト、フェリ・ピヤが言及されたとき、彼のことを *the father of scare journalism* (7.690) [扇情ジャーナリズムの父]、および *the brother-in-law of Chris Callinan* (7.690-691) [クリス・キャリナン【誤謬や矛盾した話や思慮のない言葉を使ったことで知られているジャーナリスト—筆者注】の義兄弟] と言い換える。「エウマイオス」においても主要登場人物、特にマーフィーに対して別称が多用されている。語り手はマーフィーのことを、基本的な呼び名の *sailor* [船員]^{セイラー} の他、*the communicative tarpaulin* (16.479) [話好きな水夫]^{ターポリン}、*the doughty narrator* (16.570) [勇猛な語り手]、*the globetrotter* (16.574-575) [世界旅行者]、*our soi-disant sailor* (16.620) [我々の自称船員]^{セイラー}、*the old seadog* (16.653) [老練な船乗り]^{シードッグ}、*the Skibbereen father* (16.666) [スキベリー出身の父親] など、いくつかの別称で呼んでいる。こうした人物の別称や言い換えの多用も、レネハンと語り手が共通にもつ言語の特徴と言えよう。こうした別称や言い換えを多用すると、指示対象への指示性がぼけてしまい、言葉が空回りすることがある。つまり言葉が多ければ多いほど、その指示性が拡散し、指示対象の属性の明確性が失われることがあるのだ。実際この挿話における多様な別称は、マーフィーという人間の多様性をほのめかす一方で、老練、自称、勇猛など、語のもつイメージが互いに融合しにくい形容語が並べられることで、マー

フィーと言う人間像は焦点の定まらないものになっている。こうした語り手の言い換え、別称の多用は言葉の氾濫と意味の不透明性を生み出しているが、レネハンの言い換えもそうした危険性を生み出す元と言えるのだ。

両者の共通点として次に挙げられるのは、外国語を文中の様々な箇所で見ているということである。レネハンは、*Pardon, monsieur.* (7.417) や *Enrez, mes enfants!* (7.507) や *matinée* (7.575) などのフランス語を、語り手は *qui vive* (16.118)、*haud ignarus malorum miseris succurrere disco etcetera* (16.175-6)、*rara avis* (16.226)、などのラテン語を度々使っている。こうした外国語の使用は一般的に文章に変化をもたせ装飾の効果をもたらすが、しかし度重ねて使用すると、気取りやもったいぶりが顕著に感じられるようになりがちであり、また外国語であることから意味の把握の難しさや、地の英語文との間にニュアンスの相違が生まれ、それが重なることにより意味の曖昧な箇所が増していく。文章全体が奇をてらったような、また言葉は多いが意味は不鮮明という冗漫なものに陥る危険性をもつ。そうした陥穽に陥ったのが「エウマイオス」の文体と言えよう。その意味でこの外国語の使用に関しても、レネハンの技巧の究極的な形が第 16 挿話に結実しているように思える。

この挿話でレネハン、ハイフンで 13 個の単語をつなげて

sudden-at-the-moment-though-from-lingering-illness-often-previously-expectorated-demise (7.874-5) という一つの長い名詞を作り出している。これに類似した試みは「エウマイオス」の語り手も行っている。彼は途中ピリオドを入れることなく、幾多の語、句、節を延々とつなげて構造の複雑な長い一文を作り出すのを常套手段としている。そしてそうした文の積み重ねが冗漫さを生んでいる。単語と文の違いはあるものの、相当数の小さな単位を連結させて、敢えて長大な一つにまとめた単位を作り出す方法は両者に共通している。この件に関してもレネハンの技法が「エウマイオス」の語り手の技法と結びついている。

レネハンはその他にも謎々や戯詩といった言葉の遊戯を見せている。彼は周囲の人々に *What opera resembles a railwayline?* (7.514) [どのオペラが鉄道に似ているか] という謎を出し、後に答えは *The Rose of Castile* (7.591) で、なぜなら *Rows of cast steel* (7.591) だからだと言う。またそれとは別の機会に、ステューヴンの耳元にマッキュー教授をからかう五行戯詩を囁く (7.578-582)。「エウマイオス」の語りの文体と直接の関連性はないものの、これらも日常的な言語活動からはずれた言語の玩具化であり、これが高じると究極的に冗長の要因となるように思われる。本来の伝達機能を重んじずに言葉の遊戯にこだわりをもち続けた場合、空虚な言葉の過剰を引き起こすと考えられるのだ。なるほど「エウマイオス」の語り手はレネハン程には言葉の遊戯を行っていないが、しかし言語の過剰性という特徴は両者に共通し、その点で彼らの関連性が窺える。

第 2 の根拠は、「エウマイオス」の語り手もレネハンも、ブルームに対してマイナスの感情を抱いているということである。語り手は主にブルームの言動に対する皮肉っぽいコメントによって、彼に否定的な人物評価を下している。一方レネハンもまたいくつかの挿話の中で、ブルームに対する好ましからざる感情を表している。つまり、レネハンとは作中人物であった際に抱いていたブルームへのマイナスの感情を、語り手となっても抱き続け、ブルームへの皮肉の表現として表しているように思える。

「エウマイオス」の語り手は登場人物について語る時、概して外見、経歴、現在の生活状況、心理状態などその人物の有り様を述べることはあっても、その人物についての自分の好悪、意見・価値観を明確に表明するようなことはしない。その人物評価は抑制されていると言えよう。しかしながら時として、場合によっては読者が気がつかないような微妙な形で、その人物の品定めをしている。それは彼の誇張表現、副詞の使い方などから判断できる。

例えば「エウマイオス」の冒頭におけるブルームは、その時までステューヴンらとともにバブから売春街に行っていたのに、酔った様子もなく素面であるが、その彼を表すのに語り手は *disgustingly sober* (16.62) と表現している。この *disgustingly* という副詞を何故語り手は使ったのであろうか。表面的には一般の英和辞典に載っている「とても」とか「べらぼうに」と言ったような意味をもたせるために使ったのであろう。しかし敢えて強調を表す他の副詞ではなくこの語を使った裏には、元来の意味である「胸が悪くなるくらいに」とか「吐き気を催すほどに」という否定的な意味を同時に含ませたいという意図が、いやそれ以上に、まずこの意味の方を読者の心に浮かばせようという意図があったように思える。これはブルームの人格を傷つけるほどに、強いマイナスイメージを与える副詞である。バブに行った医学生たち、あるいは売春宿にまで行ったステューヴンとリンチが酔っているのに、一人素面で浮き上がっているブルームを、周囲に同調しないと行って非難するような副詞なのだ。

一方それとは逆に、ブルームを過度に褒め称えて、皮肉効果をもたらそうとしている箇所もある。つまりブルームを現実のブルーム以上に表現して、逆に彼の人物像を貶めようとする手法である。例えば彼のズボンの腰のボタンが取れてしまったことについて語り手は次のように語る。

Entering thoroughly into the spirit of the thing, he heroically made light of the mischance. (16.37-9)

この本質が完全に分かっていたので、英雄的にも彼はその不運を軽視した。

きわめて些末なことを英雄視するのは誇張表現の典型であり、その効果は言うまでもなくブルームへの当てつけである。また御者溜まりを出る際ステューヴンはブルームに、

何故閉店すると居酒屋では椅子をテーブルの上にのせるのかと質問するが、それに答えるブルームを語り手は次のように表現する。

To which impromptu the neverfailing Bloom replied without a moment's hesitation, saying straight off: (16.1711-2)

それに対し、けっしてやり損なうことのないブルームは、即座にその場で一瞬の躊躇もなく応え言った。

勤め先を解雇されたり、妻を他の男に寝取られたり、息子を生後 11ヶ月で死なせたり、大きな「失敗」を度々経験してきたブルームをこのように言い表すのは、皮肉の表現と言わざるを得ない。また船によるロンドンへの長距離旅行を夢想しているブルームについて、語り手は次のように言っている。

He was at heart a born adventurer though by a trick of fate he had consistently remained a landlubber except you call going to Holyhead which was his longest. (16.502-4)

彼は心の中では生まれつきの冒険家であったが、ただ一番遠くに行ったのはホリヘッドまでで、それ以外は運命のいたずらで常に陸の上の人のままであった。

単なるロンドンまでの船旅を冒険扱いすることには、大きな皮肉が感じられる。しかも今まで一番遠くに行ったのがホリヘッドまでのブルームを、生まれつきの冒険家扱いするのはより大きな皮肉である。またおそらく家庭や仕事の都合でこうした船旅が実現できないであろうことについて、「運命のいたずら」という大仰な虚構の理由に帰することにも、滑稽さと、家庭と仕事に縛られた彼への皮肉が含まれている。昼間ブルームは国立博物館に行き、ギリシャ彫刻の女神像に肛門があるかどうか確かめるのだが、そのことについて語り手は、being a bit of an artist in his spare time (16.1448-9) [余暇においては、彼はちょっとした芸術家であったので]と言っている。些末な性的好奇心が動機となっている彼の行動を、芸術に関わる動機に基づかせていることにも、語り手はブルームへの滑稽な皮肉を表している。

以上のように語り手は、数が少なく目立たない形ではあるが、ブルームに対してマイナスの評価を下している。

一方レネハンについて言えば、彼がブルームと接触する機会、あるいは他の人物にブルームについて言及する機会は、『ユリシーズ』全体ではそれほど多くはないものの、しかしその少ない機会の中で、彼もまたブルームに対してある種の好ましからざる感情を示している。

第 7 挿話で「フリーマンズ・ジャーナル」の新聞社を出たブルームの背後で、新聞配達人の子供たちが列を作ってからかう光景を見てレネハンは笑い転げ、ブルームのことを、O, my rib risible! Taking off his flat spaugs and the walk. (7.448) [おかしくてたまらないよ！あの扁平足とあの歩き

方をやめさせてくれ。]と言い、馬鹿にしたように素早い動きで戯画化して、マズルカを踊り出す。第 12 挿話ではアスコット競馬でブルームが穴馬を当てたと周りの者に吹聴し、皆がブルームの噂話をして悪口を言うきっかけを与え、その直後ブルームの居場所を尋ねたマーティン・カニングムに対して、Where is he? Defrauding widows and orphans. (12.1622) [奴がどこにいるかだつて。未亡人と孤児をたぶらかしているよ]と、ディグナムの遺族の面倒を見に行ったブルームを悪し様に罵る。またこの場でブルームがユダヤ人であることから、皆はユダヤ人について話し合うのだが、その際レネハンは、Expecting every moment will be his next. (12.1649) [彼らユダヤ人の次の世代も、(救世主を)常に期待してばかりいるのだらうよ]、とユダヤ人およびユダヤ人であるブルームに侮蔑するような口調で言及する。そしてまた、この侮蔑的な文句をレネハンは、第 14 挿話において形を変えながら再び用いている。ナショナル・マタニティー・ホスピタルでブルームと直接対話した際、ピュアフォイ夫人の分娩が非常に長くかかっていると言うブルームに対して、酔ったレネハンは、Expecting each moment to be her next. (14.178) [彼女の次の子供となるように、絶えず孕んでいるのさ]というそれに酷似した文句を用いている。ブルームを侮蔑するような文句を、変形しながらも再度直接ブルームに対して使うことで、ここでもレネハンにはブルームに分からないように彼への侮蔑の気持ちを表したのである。この後レネハンにはブルーム用のコップを手に取り、ブルームに差し出して一杯飲むように言い、双方の健康のために、と言って自分の分の酒を飲み干す。これは一見ブルームへの親近感を表しているかのように見えるが、これも彼が a passing good man of his lustiness. (14.181-2) [一時的に元氣一杯な善良な男]になっているからである。⁶⁾ この「一時的」という表現も彼の友好性が表面的であることを示すものである。また第 15 挿話の幻想の場面の中で、ブルームは国王となり善政を施す旨の演説をするが、それに対してレネハンには、Plagiarist! Down with Bloom! (15.1734) [剽窃者！ブルームを打ち倒せ!]と叫び、その敵意をあらわにしている。

このように「エウマイオス」の語り手とレネハンとは、両者ともにブルームに対する否定的感情をもっている。この共通要素が両者を結びつける根拠の一つとなりうるであろう。『ユリシーズ』の作品の中で抱いたブルームに対する悪感情を、語り手となってもレネハンにも持っている。全知全能の語り手となったが故に、ブルームに抱いた侮蔑と怨嗟と敵意とを表に出さないようにはしているものの、しかしはっきりそれとは分からない方法で読者にほのめかそうとしている。

第 3 の根拠は、『ユリシーズ』には明記されてはいないものの、この「エウマイオス」の時間帯におけるレネハンが疲労していることが十分推測されるということである。この挿話の語り手が疲労感にあふれたものであり、レネハン

の疲労がそれに反映しているということである。しかし実は元来この「エウマイオス」の文体はブルームとスティーヴンの疲労を反映しているとされてきた。例えば C.H. ピークは次のように言っている。

The usual explanation is that both men [Bloom and Stephen] are tired out, their exhaustion being mirrored in exhausted language, a limp string of hackneyed phrases and worn-out clichés. ⁽⁷⁾

[従来の] 説明はたいてい、ブルームとスティーヴンの二人が疲れ果て、その疲労がその力を消耗した言葉遣いに反映し、一連のしまりのない陳腐な文句と使い古しのクリシェーとなっているというものだ。

またヒュー・ケナーも、By an old custom this style gets called 'tired' -- imitative form, appropriate to tired men [Bloom and Stephen]. ⁽⁸⁾ [以前からの慣習によると、この[挿話の] 文体は、疲労した二人にふさわしい、「疲労した」一模倣形態と呼ばれている。] と言っている。しかしながら二人の疲労が文体に反映されているという見方は、今日はほとんどとられていない。ポール・キャスペルは次のように言っている。

We seem to have outgrown the notion, popular in early criticism, that this episode's language and style were meant to reflect the weariness of the characters [Bloom and Stephen]. ⁽⁹⁾ 我々は初期の批評によく見られた、この挿話の言葉遣いや文体が、これらの登場人物の疲労を反映するようになっているという考え方から脱却したように思える。

先に挙げたピークもケナーも、キャスペル同様、この挿話の二人の主要人物の疲労が文体に反映されているという考え方をとってはいない。その理由はブルームがほとんど酔っておらず、積極的、行動的に振る舞っているからである。彼は身体的には疲れているかも知れないが、死んだ息子の代役とも言えるスティーヴンの言動に注意を払い、酔っている彼の面倒を見、またこの若者の行く末を心配している。そうした世話のために精神状態を生き生きとさせているのだ。それ故ブルームの心の有り様が文体に影響しているとは思えない。またもう一人のスティーヴンに関して言えば、彼は確かに心身ともに疲れてはいるであろうが、この挿話ではマイナーな脇役に下がっており、その疲労状態が文体に影響を及ぼすほどの重要な役柄をもっているとも思えないのだ。

しかしながら文体自体は、確かに生気があるとは言えない。常套文句に満ち、冗長で込み入った、時として混乱することもある文体は、人物の無気力と受動性を表した疲労した文体であると言える。そしてこの疲労感を生み出している主が、レネハンであるように思えるのだ。彼は第 7 挿

話の最後でフリーマン・ジャーナル社にたむろしていた者たちとともにムーニーの酒場に飲みに行くが、その後もオーモンド・ホテル、バーニー・キアナンの酒場、ナショナル・マタニティー・ホスピタル、その病院を出たあと皆で飲みに行った酒場など、『ユリシーズ』に記されてあるだけでもこれだけの酒場等で飲んでいる。またこの飲んでいる間もアスコット競馬への賭けに心を奪われ、私設馬券屋など競馬関係の場所に忙しく出入りしていることが窺える。しかも最終的に彼はこの競馬で損をする。こうした状況から見て、この挿話の時間帯である午後 10 時 40 分から午前 2 時までの間、彼がスティーヴンと同じくらい、あるいはそれ以上に疲労していることが推測できる。そしてその疲労感がこの挿話の文体となって表されているように思えるのである。

次に挙げられるのは、レネハンの言語能力がこの挿話の語りを行えるだけの高さをもっているということである。レネハンの言語能力が具体的にどのようなものかはすでに見たところではあるが、このことは『ダブリナーズ』における、レネハンにかかわる次の記述でも裏付けられよう。

Most people considered Lenehan a leech but in spite of this reputation his adroitness and eloquence had always prevented his friends from forming any general policy against him. He had a brave manner of coming up to a party of them in a bar and of holding himself nimbly at the borders of the company until he was included in a round. He was a sporting vagrant armed with a vast stock of stories, limericks and riddles. ⁽¹⁰⁾

たいていの人はレネハンを寄生虫と考えていたが、しかしこうした風評にもかかわらず、彼の話の巧みさと能弁ぶりのために、彼の友人は概して彼を敵に回すようなことをけっしてしなかった。彼は堂々とバーにいる一団の客に近寄って、うまくその仲間の末端に加わり、ついには一座の中に収まるのであった。彼は遊び人のチンピラで、おびたしい数の噂話や五行戯詩や謎々を蓄え、身に備えていた。

この引用文中の、特に論争の相手として敵に回したくないと皆に思わせているという一段は、それだけ彼の話には、単に言語の遊戯の技巧だけでなく、相手を論破する論理性、構成性があることを示すものであろう。確かに冗長さや常套文句に溢れ、時々その言語が混乱したり途中で終わったりするなど、その語りには不安定なところはあるが、ブルームとスティーヴンが売春宿を出て二人きりになった時から御者溜まりを出るところまで、事象を整理し、それに筋道を立てて一つの挿話として物語ることのできる構成能力を、レネハンがもっていることを窺わせる記述である。他の登場人物の中で、彼ほど高い文章の表現能力をもっているよう描かれている者は見当たらないのだ。

レネハンが多くの下層階級の者につきあい、彼らから噂

話を豊富に仕入れては、それをアレンジして他の飲み仲間
に物語るという行動パターンは、上記だけでなく『ユリシ
ーズ』にも記されてある。

He was a kind of sport gentleman that went for a merryandrew
or honest pickle and what belonged of women, horseflesh or
hot scandal he had it pat. To tell the truth he was mean in
fortunes and for the most part hankered about the coffeehouses
and low taverns with crimps, ostlers, bookies, Paul's men,
runners, flatcaps, waistcoateers, ladies of the bagnio and other
rogues of the game or with a chanceable catchpole or a tipstaff
often at nights till broad day of whom he picked up between his
sackpossets much loose gossip. He took his ordinary at a
boilingcook's and if he had but gotten into him a mess of
broken victuals or a platter of tripes with a bare tester in his
purse he could always bring himself off with his tongue, some
randy quip he had from a punk or whatnot that every mother's
son of them would burst their sides. (14.533-544)

彼はある種の遊び人であり、おどけ者あるいは無邪気な
いたずら小僧として皆に通っていた。女や賭け馬や最新
のスクャンダルをめぐる事柄をよく知っていた。実を言
えば、彼の財産は乏しく、たいいてい喫茶店や品のない居
酒屋をぶらつき、ポンビキや馬丁、呑み屋、居候、客引
き、見習い、売春婦、淫売屋の女将、他の売春関係のご
ろつき、機会があれば取り立て屋や廷士と、度々夜通し
真昼までしゃべっていた。そしてミルク酒を飲みながら、
彼らから多くのみだらなゴシップをつかんだ。彼は最も
貧相なレストランでいつも食事をとっていたが、財布の
中のなげなしの6ペンスで、残り物のごたまぜの料理と
一皿の貧弱な食事を腹に詰め込むと、いつも舌をなめら
かにすることができた。そして売春婦あるいはそういった
輩から仕入れておいたみだらな軽口をたたき、皆の腹
をよじらせるのであった。

こうした常習的行動は、「エウマイオス」の語り手として
の適性と無関係ではないであろう。語り手としての地位に
ある以上、役目柄得た情報量は多大なものであり、それを
他者に語るには、先に述べた説得力とともにある種の慣れ
と経験が必要であろう。こうしたものをレネハンは手に入
れている。他人の個人情報を数多くもち、それを人に語る
のに慣れている者として、レネハンはこの挿話の語り手の
適任者と言える。

またそうしたレネハンの話が、パブの飲み仲間を笑わせ
るほどに面白いことも、「エウマイオス」の語りの諧謔性と
関係があるであろう。この挿話の文体の一番の特徴はクリ
シェーと冗漫さにあるのだが、ところどころに見られる諧
謔とユーモアも、もう一つの特徴と言えよう。テレグラフ
紙にディグナムの葬式の参列者名が書かれてあるが、ブ
ルームの名は L. ブーム [L. Boom] と誤記されている。そ

の誤記を使って語り手はわざと、L. Boom pointed it out to his
companion (16.1265-6) [L. ブーム氏は学士である相手にそ
れを指摘した] と語り、次にブルームという正確な名を記
す場合には、Bloom (properly so dubbed) (16.1307) [ブルーム
(正しくはこういう名前なのだが)] とユーモアのある括弧
を用いた「注」を入れている。またブルームとステューヴ
ンが御者溜まりを去る際、その御者たちを描くのに語り手
は the elite society of oilskin and company whom nothing short of
an earthquake would move out of their dolce far niente. (16.1704-
6) [地震でも来なければけっしてこの安逸状態から動かな
いであろう、防水服を着たエリート集団] と滑稽な表現を
使っている。またこの挿話の最終場面において、ブルーム
の自宅に行こうとする二人の目の前で、馬車の馬が大便を
するが、この様子の書き表し方にもユーモアがある。

The horse having reached the end of his tether, so to speak,
halted and, rearing high a proud feathering tail, added his quota
by letting fall on the floor which the brush would soon brush up
and polish, three smoking globes of turds. Slowly three times,
one after another, from a full crupper he mired. (16.1874-7)

この馬は言うならば限界に達して立ち止まり、誇り高く
房毛の尻尾を高く跳ね上げ、路面—ブラシがまもなく磨
いてピカピカにするであろうが—に三つの湯気の立った
球状の馬糞を落とすことで、排出の割当量を増やしたの
だ。ゆっくりと三回に分け、一つずつ丸々とした尻から
大便を垂れたのだ。

こうした語り手の諧謔性とユーモアの存在も、おもしろ
おかしく飲み仲間には噂話を語り、笑わせようとするレネハ
ンの日頃の行動の反映と考えられる。レネハンの笑いの才
能は語り手になっても発揮されているように思われる。

(3)

これまで見てきたように、「エウマイオス」の語り手の使
用言語、心情、身体状況などは、レネハンのそれと酷似し
ており、両者は同一人物と推測されよう。しかしレネハン
は『ユリシーズ』のいくつかの挿話の中で我々が見た実際
のレネハンではない。語り手としてのレネハンはけっして
お調子者でも放蕩者でも遊び人でもない。彼は至ってまじ
めに真剣に語っている。彼は作者から語り手の任をまかさ
れたいわば仮定上の変容したレネハンである。語り手の特
権、全知全能の力を与えられたとき、彼は他人の心情や過
去の経験など、その人物でなければ知ることのできない情
報の持ち主となる。そうした特権を与えられると、その重
さを自覚し紳士然として、時にはもったいぶった口調で語
る。しかしその語り口は元来の言葉の過剰性を抜ききれな
い。謎々や五行戯詩は控えたものの、代わりにクリシェー
と冗長な文で、相変わらず表現過剰な言葉遣いは直らない

のだ。しかも語り手の座に就いたとはいえ、元々プロの語り手ではなく一登場人物であったため、その文才でカバーしながらも、時として失策を犯す。途中言いよんだり、言葉が混乱したり、伝聞・憶測を基とした情報を我々に与える。

では何故作者はこのような形の語りにしたのか。また何故語り手をレネハンにしたのか。これまで作者は様々な形の語りを試してきた。最初の数挿話のイニシャル・スタイル、第11挿話の音楽的構成・文体を基調とした語り、第12挿話の一人称の語り、第12挿話や第13挿話のような二重の語り、第15挿話における劇形式による語り手の消滅、などなどである。そしてこの第16挿話では、イニシャル・スタイルの全知全能の語り手と、第12挿話における無名の語り手のような作中人物の語り手を組み合わせたとした語り手による語りの形式をとってみた。そしてこうした一人称的語り手を三人称的語り手に変容させる実験は、今みてきたように、語りの未熟性、使用文体の類似性、性格や生活環境の反映などの結果をもたらした。

また語り手となるべき登場人物の選定においてレネハンを適任者としたのは、そうした実験対象となるだけの言語能力と語りの巧さをもった人物だったからである。彼は役割上いくつかの挿話に少しの間だけ登場するだけのマイナーな存在かもしれないが、しかし文才という特性を作者から付与されている点で特異な存在である。その特異性故に、作者により重要視され語り手に抜擢されたのだ。もしレネハンでなく他の人物であったならば、言語運用能力の点で、語り手となった時と登場人物であった時との間に乖離が生じ、整合性が欠けてしまうであろう。しかしまた同時に、彼の語り手への採用は、実際のレネハンと語り手となったレネハンとの間の言語の相違や、語り手としての失

策をも提示し、類似しているが故に効果の出るその面白みを読者に感じさせようとする狙いもあったろう。

(注)

『ユリシーズ』の原文の引用は、*Ulysses*, ed. Hans Walter Gabler with Wolfhard Steppe and Claus Melchior. London: The Bodley Head, 1986 からのものである。() 内の数字は、左側が挿話番号、右側が行数を表している。またその日本語への訳出には、丸谷、永川、高松訳『ユリシーズ』集英社、1997年を参照した。

- (1) Hugh Kenner, *Joyce's Voices* (University of California Press 1978), 35.
- (2) Kenner, 38
- (3) Daniel R. Schwarz, *Reading Joyce's "Ulysses"* (Macmillan Press LTD 1987), 233
- (4) Marilyn French, *The Book as World: James Joyce's "Ulysses"* (London: Abacus 1982), 208
- (5) French, 209
- (6) この引用箇所に関して、*passing* には *very* の意味があり、「非常に元氣一杯な善良な男」という訳も成り立ちうるであろう。しかし同様の強調の意味を表す語の中でも、ジョイスがあえて *passing* という語を採用したのは、この「一時的な」の意味を表面化しようとしたからであろう。先の *disgustingly* の場合と同様、たとえ強調の意味が含んでいようと、レネハンがブルームに対して好ましからざる気持ちをもっていることを、この表現は表している。
- (7) C.H. Peake, *James Joyce: the Citizen and the Artist* (London: Edward Arnold 1977), 277
- (8) Hugh Kenner, *Ulysses* (London: George Allen & Unwin 1980), 130
- (9) Paul van Caspel, *Bloomers on the Liffey: Eisegetical Reading of James Joyce's "Ulysses"* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press 1986), 223
- (10) James Joyce, *Dubliners* (New York & London: Garland Publishing Inc. 1993), 208

ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』: 第16挿話「エウマイオス」の語り手

大島 由紀夫

(東京海洋大学海洋工学部海事システム工学科)

要旨: 『ユリシーズ』の「エウマイオス」の語り手は一般にブルームとされているが、彼の実際の文体はこの挿話の語りの文体と異なる故に、この考え方には難がある。この挿話の文体に類似しているのはレネハンの文体である。またブルームへの悪感情、疲労状態、言語使用能力の高さなど、レネハンと語り手には共通点がある。それ故レネハンがこの挿話の語り手と推測される。ただ語り手としての彼の性格は、登場人物としての彼の性格から変容している。

キーワード: ユリシーズ, エウマイオス, 語り手, レネハン